

白血病を再発した患児へオンライン授業、通級、 多職種で復学支援に取り組んだ一報告

四宮 裕美 北野 美優 西崎千代美
武市 知子 大和紗由梨

徳島赤十字病院 8階北病棟

要 旨

本研究は、患児へオンライン授業、通級、多職種支援を取り入れた復学支援を行い、成長発達に必要な学ぶ喜びを得られることを目的とした。対象者は小児がん患児1名とその母親、原籍学校担当教員1名とし、患児と母親にはインタビューを実施し、担当教員には質問紙に回答してもらった。

復学前の思いとして、「オンライン授業に対する期待と効果」「復学に対する期待と不安」「オンライン導入に関する期待と経験不足」「通級に対する期待と学習時間の調整」があった。復学後の思いとして「オンライン授業による繋がり、大切さ」「オンライン授業の効果」を感じていた。

以上の結果より、原籍学校との繋がりを持つことで、不安の軽減を図り、復学への一助となった。通級は、学習時間と体調のバランスを考慮し、医療者側が通級担当教員と連携し、援助していく必要がある。多職種支援は、苦しい入院生活の中で楽しく学習することができ、よい思い出となった。

キーワード：オンライン授業、通級、復学支援、小児がん

はじめに

A病院は小児がん連携病院に指定されており、主に小児血液がんの患児を年間2～3名受け入れ治療にあたっている。患児は長期入院を余儀なくされるため、地域の学校への通学は困難となる。A病院には院内学級がないため、希望者に対しては院内通級指導教室（以下通級とする）で学習支援を行っているが、入院中の患児への学校教育に対する支援は不十分であった。入院中の教育について、平賀¹⁾は、「かつては、入院を要する子どもに対する教育より疾患の治療・ケアが優先されていたが、現在は入院している患児のQOLを向上する上で、入院中の教育が重視されるようになっていく」と述べている。

そこで、通級に加えコロナ禍で普及が進んだオンライン授業を取り入れることで、通級では得られない原籍学校との繋がりを持つことができ、復学後の

心理的ストレスを軽減し、学校生活や社会生活に早期に適応できるのではないかと考えた。今回、入院中に小学校入学となった患児とその家族に対して通級、オンライン授業を取り入れ、さらに、多職種が考案した病院内でしか経験できない学習支援を行うことで、成長発達に必要な学ぶ喜びを得られた症例を報告する。

研究目的

通級に加え、タブレットを用いたオンライン授業を取り入れ、退院後に円滑な復学ができるよう支援し、さらに多職種支援を行い、病院内でしか経験できないような学習支援を行うことで、成長発達に必要な学ぶ喜びを得ることを目的とした。

研究方法

1. 研究デザイン：実践報告
2. 対象期間：2022年6月1日～2023年10月31日
3. 対象者：オンライン授業と通級を受ける小児がん患児1名とその母親、（患児は、2歳で急性リンパ性白血病を発症。20XX年、小学校入学前に上記疾患を再発し母親より末梢血幹細胞移植を実施した。）原籍学校の担当教員1名（1年生時担任）
4. 場所：A病院A病棟、説明室
5. データの収集方法
 - 1) オンライン授業、通級、多職種から学習支援を受けた小児がん患児1名とその母親については、退院後の初回外来受診時に研究について説明し同意を得る。患児と母親にインタビューガイドに沿ってインタビューを実施する。インタビュー内容は入院中に行ったオンライン授業、通級、多職種スタッフの復学支援について、復学前後の二期に分けて感じたことや思ったことについてICレコーダーを使用し録音する。原籍学校の担当教員には質問紙を郵送し、研究に同意を得られた場合返送してもらう。
 - 2) 録音した患児と母親の音声、また担当教員の回答から逐語録を作成する。
6. データの分析方法

録音した患児と母親の音声より逐語録にしたデータから意味内容を類似性に基づいてコードを分類し、類似したコードを統合し、カテゴリー化し分析する。担当教員から得た回答も同様に、カテゴリー化し分析する。

倫理的配慮

A病院倫理委員会医療審議部会の承認を得て実施した。対象者には研究の主旨、方法、研究参加・中断の自由性、個人のプライバシー保護、得られた情報は研究の目的以外には使用しないことを文書で説明した。質問紙は無記名とし、質問紙の投函をもって研究に同意を得られたこととした。本研究に関連して開示すべき利益相反関係にある企業等はない。

結 果

同意を得た患児とその母親に対し、復学前と復学後の外来受診時にインタビューを行った。入院中に行ったオンライン授業、通級、多職種支援について感じたことや思ったことを逐語録より抽出した。復学前については28のコード、12のサブカテゴリー、4のカテゴリー（表1）、復学後については50のコード、14のサブカテゴリー、7のカテゴリー（表2）が抽出された。

担当教員に対しては、オンライン授業について回答を得、13のコード、4のサブカテゴリー、2のカテゴリー（表3）が抽出された。

以下、カテゴリーを【】、サブカテゴリーを『』、コードを<>として示す。「」は逐語録より抜粋した語りを示す。また、個人の特定を避けるため、話の筋を変えずにデータの一部に修正を加えた。

表1 復学支援を受けた患児、家族の思い【復学前】

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
オンライン授業に対する期待と効果	オンライン授業に対する前向きな気持ち	早くやりたいと言っていた、早くつないでほしいって
		お友達の顔見て、会いたい、会いたいと言っていた
	クラスメイトとの繋がり	休んでいる感じがしない、繋がっている感じ
		みんなと繋がれたらっていうのが一番
		全然違うと思う、すぐに初めて学校に行くのと
	復学に対する安心感	顔も分かるし、雰囲気も分かるしすんなり入りやすい
		プリントだけもらって私がやらせてもなかなかできないし、みんながやっているのを見たら全然違う
		オンライン授業良かったです
復学に対する期待と不安	復学に対しての期待	(患児) 早く行きたい
		(心配なこと) ない
	復学の際、感染症などに対する身体的不安	(復学は) 年明けてか2年生になってからかもしれない
		コロナとかインフルエンザも流行っているし、感染したら大変
	オンライン授業を受ける環境	オンライン授業は家では(患児の)妹が邪魔してできなかった (患児も)嫌になって、まだ病院の方がゆっくりできる
通級に対する期待と学習時間の調整	通級開始前の期待	最初は楽しみだって
		〇〇さん(医療社会)が提案してくれて、学校では教えてくれないことって言って、ちょうど英語の先生なので(患児が)英語やりたいって言っていました
	学習の楽しさ	(患児) 楽しかった
		内容は先生とゲームみたいなのでやっていました
	授業時間の長さや疲労感	授業時間が長かった、2時間続けて疲れきってしまって、(患児も)態度に表れていたから1時間でも良かったかな 先生の都合で昼からで、午前中だったらねえ
多職種との交流による学び、心理的サポート	遊びを取り入れた運動療法	リハビリはたくさんした、野球もバスケも廊下でした
		(患児) ドッジボール楽しかった
		宝探し何十回もやっていました、ありとあらゆるところで
	作業を通じた心理的サポート	(患児) 粘土
		粘土で寿司を上手に作っていました、私(母)が夢中になって、あの時間が貴重でした。今は全くないから、あんな一生懸命できる時間
	院内でしか経験できない楽しい思い出	(患児) 楽しかった
		ドクターヘリの屋上に行ったり
		(患児) 今日ドクターヘリ見えた

表2 復学支援を受けた患児と家族の思い【復学後】

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
オンライン授業による繋がり, 大切さ	オンライン授業による復学への安心感	オンラインで学校の雰囲気も授業の感じとかも分かって良かった
		何も知らないより心強かったし、友達ともそれで繋がって
		別に長期間全然会ってないって感じでないからパッと行きやすかった
		ずっと行きたい、行きたいって言って
	クラスメイトとの繋がり, 大切さ	ウェルカムがすごかった
		だから余計すんなり行けたかもしれないですね
		(患児) のこともみんな病院でいることも分かっているから
		(患児) が入院中は休んでいる子がいて、その子と一緒に受けていた
	学校に慣れ, 学習を楽しんでいる	学校楽しい
		算数好き
		鬼ごっこ楽しかった
	オンライン授業を受けてなかったら患児の存在を忘れられてしまっていたのではないかな	ちょっと緊張するって言っていたけど オンラインがあるから、〇〇ちゃん(患児) 側もやし、向こうも完全に切れていたなら、1年空いてしまうと〇〇ちゃん(患児) の存在を忘れられてしまう
多職種との交流による学び	リハビリの楽しい思い出	リハビリの人と遊んだりするのは楽しんでいた
		フラフープ沢山した
		宝探しすごく沢山した
		野球すごく沢山した
		活発だった
		リハビリ室に行った
	院内でしかできない学びの場	探検のこと思い出して喜んでいました
		ヘリコプター
		ドクターカーでドライブした
		先生にゼリーつけてエコーをあてたり 勉強以外の経験 楽しかった
復学への喜び	患児の復学を楽しみにしている	いつ来るん? いつ来るん? ってみんなが気にしてずっと言ってくれていた ウェルカムな感じ
		サプライズで行くって自分で
	復学した患児への受け入れ	すごく湧いていた
		いろいろ教えてくれて
		楽しみで行きたすぎて
		ずっと行きたい、行きたいって言って
学習の遅れ	宿題の多さ	ちょっと勉強大変 うーん、なんか難しくないけど、(宿題) いっぱい出される
		先生が、1, 2年のやつを〇〇ちゃん(患児) が行っていない時の分を全部やらせようと必死で
	復学後の遅れを取り戻す困難さ	私(母) は、とばしてくれてもいいなって思っていたんですけど、やっぱり基礎が大事やと言って
		担当の先生を二人くらいつけてくれて
		普通は1日1, 2枚やけど
		5枚とかワーク何冊とか、そんないきなりねえ
担任の先生の関わり	1年生の担任の先生との関わり	若い先生だし力入っている ビシバシ育てようみたいな、先生が、気合入っているから
		クールでした
		私も先生久しぶりって言ったら「あー」みたいな感じで
		向こうの先生も自分の生徒のことで忙しいから
		(患児) のこと一生懸命やってくれたけど、もうやっぱり引き継いで、もう自分の1年生のことでいっぱい、いっぱいな感じで
		やっぱり落ち着いているって言われますね
入院生活で大人との関わりの多さ	他のクラスメイトより落ち着いた態度	2歳の時から大人の中でずっと入院生活で
		他の子は2年生とか、ねえ、子ども子どもしている
	クラスメイトは患児のことが気になり学習に集中できない	(患児は) みんなとやりたいけど、別々でいいないと他の子がまじめにしないからだめって
未来への前向きな気持ち	いろいろなことに対する挑戦, 希望	いろんなことやりたいって
		スポーツでも、あつ、カヌーやりたい
		野球やってみたい

表3 復学前後のオンライン授業について (担当教員)

カテゴリー	サブカテゴリー	コード
オンライン導入に関する期待と経験不足	オンライン授業に対する前向きな気持ち	オンラインで繋がりが、お互いの顔が見えることで、クラスの児童も患児にとってもクラスの一員という気持ちを感じることができて良いと思った
		学習ができる、できないよりも友達存在を身近に感じ、まだ通学したことのない学校、教室がどんなところかを知ってもらえること
		一緒に学習を進めていきたいと思った
	機器のセッティングの難しさ	スムーズにつながるのか不安
		iPadを固定する場所に悩んだ、クラスの子たちに画面が見えると授業に集中できなくなるのではないかと、また反転して文字が映ってしまうので映し方にも悩んだ
		ギガ数に制限があったので国語と算数だけオンライン授業をした
		クラスの子が考えたり発表したりしていても、iPadをテレビのように動かしてあげられないのでつまらなかったかもしれない
オンライン授業の効果	オンライン授業により友達の存在を身近に感じている	友達と顔を合わせて「バイバーイ」「また明日」「切るよー」とお互いに声を掛け合う姿は笑顔で良かった
		同じワーク類を渡していたので一緒に進めることができた
		友達も患児の頑張っている姿を励みに学習に取り組むことができた
	クラスメイトは患児の復学に期待している	いつも患児の話題は子供たちの会話のなかでつきなかつた
		「〇〇くん、いつから来られるのかな」「明日は教室にいたりして」「お手紙書きたい」「2年生になっても待っているよ」と声をかけていた
		オンラインで繋がっているから一体感が深まった

インタビューガイド (患児・家族)

1 インタビュー第1期

復学前 (退院後の初回受診時)

1) オンライン授業開始前

- ・オンライン授業のことについての話を聞いた時、どのように思いましたか
 - ・オンライン授業をうけることで何を一番期待していましたか
 - ・どのようなことをしてみたいと思っていましたか
 - ・友達の顔を見ることについてどう思っていましたか
 - ・クラスメイトに自分 (患児) の顔を見せることについてどう思っていましたか
 - ・どのような時 (時間帯、体調、授業時間、授業科目) にオンライン授業を受けたいと思っていましたか
 - ・オンライン授業について不安を感じたり、困ることはありましたか
- あると答えた場合
- ・どのようなことですか

2) オンライン授業施行中

- ・授業をうけてみてどう思いましたか
- ・良かったことはありましたか
- ・困ったこと、嫌だったことはありましたか
- ・どのようにしてほしいか希望がありましたか

3) 通級について

(1) 通級開始前

- ・通級の話をはじめて聞いた時、どのように思いましたか
- ・病室に先生が来ることについてどう感じましたか
- ・担任の先生ではない先生が勉強を教えてくれることについてどう思いましたか
- ・通級ではどのようなことを勉強したいと感じていましたか

(2) 通級施行中

- ・授業をうけてみてどう思いましたか
- ・良かったことはありましたか
- ・困ったこと、嫌だったことはありましたか
- ・どのようにしてほしいか希望がありましたか

4) 多職種チームについて

- (1) 多職種（理学療法士、公認心理師、医療社会福祉士）が介入したことで印象に残っていることはありますか

2 インタビュー第2期（復学後の外来受診時）

<復学状況について>

- 1) 現在、どのくらいのペースで通学していますか

- 2) 入院中にオンライン授業、通級、多職種の復学支援を行ったことが、復学時どのように繋がりましたか

- 3) 復学に向け、入院中にしてほしいことがあれば教えてください

担当教員への質問内容

1) オンライン授業開始前

- ・オンライン授業のことについての話を聞いた時、どのように思いましたか
- ・オンライン授業を行うことで何を一番期待していましたか
- ・どのようなことをしてみたいと思いましたか
- ・授業の準備について不安や負担と覚えることはありましたか
() ある () ない

→あると答えた場合にお聞きします

- ・どのようなことですか

2) オンライン授業施行中

- ・オンライン授業を行ってどう思いましたか
- ・良かったことはありましたか
() ある () ない

→あると答えた場合にお聞きします

- ・どのようなことですか
- ・困ったこと、嫌だったことはありましたか
() ある () ない

→どのようなことですか

3) 復学後について

- ・オンライン授業を取り入れることにより復学後に影響はありましたか
- ・復学後で感じた改善点などありましたか
- ・その他ご意見などがありましたらご記入ください

考 察

1. 復学前の思い(オンライン授業・通級・多職種支援)

1) オンライン授業

オンライン授業開始前には、患児が「お友達の顔見て、会いたい、会いたいと言っていた」と『オンライン授業に対する前向きな気持ち』が聞かれ、実際にオンライン授業を受けた際には、母親より「休んでいる感じがしない、繋がっている感じ」と『クラスメイトとの繋がり』を感じていた。また、「顔も分かるし、雰囲気も分かるしすんなり入りやすい」「プリントだけ貰って私がやらせてもなかなかできないし、皆がやっているのを見たら全然違う」

「オンライン授業よかったです」と、『復学に対する安心感』が得られ、【オンライン授業に対する期待と効果】を感じていた。永吉ら²⁾は「入院中から、クラスメイトの疾患に関する理解と心理的準備を促し、経験者と時間や場を共有することで、復学後の友達関係への違和感を軽減し、再統合が促される」と述べており、オンライン授業の重要性が示唆された。一方で、母親より「オンライン授業は、家では患児の妹が邪魔してできなかった」「患児も嫌になって、まだ病院の方がゆっくりできる」と、『オンライン授業を受ける環境』も重要であり、入院中にオンライン授業の導入ができたことは復学に向けて有効であったと考えられた。

また復学に対して、「早く行きたい」「心配なことはない」と患児は『復学に対しての期待』がある一方、母親は「(復学は)年明けてか2年生になってからかもしれない。コロナとかインフルエンザも流行っているし、感染したら大変」と『復学の際、感染症などに対する身体的不安』を感じており、【復学に対する期待と不安】を持っていた。

担当教員からは、オンライン授業導入について、「オンラインで繋がり、お互いの顔が見えることで、クラスの児童も患児にとってもクラスの一員という気持ちを感じることができて良いと思った」「学習ができる、できないよりも友達存在を身近に感じ、まだ通学したことのない学校、教室がどんなところかを知ってもらえること」と『オンライン授業に対する期待』を感じていた。また、「スムーズにつながるのか不安」「iPadを固定する場所に悩んだ。クラスの子たちに画面が見えると授業に集中できなくなるのではないかな、また反転して文字が映ってしまうので映し方にも悩んだ」と『機器のセッティングの難しさ』を感じており、【オンライン導入に関する期待と経験不足】を知ることができた。

2) 通級

通級開始前には、「楽しみ」「英語の先生なので、英語やりたいって言っていました」と、母親より『通級開始前の期待』が聞かれた。通級を受けて、「内容は先生とゲームみたいなのでやっていました」と『学習の楽しさ』を感じる一方で、「授業時間が長かった。2時間続けて疲れ切っちゃって。患児も態度に表れていたから1時間でも良かったかな」「先生の都合で昼からで、午前中だったらねえ」と『学習時間の長ささと疲労感』を感じており、【通級に対する期待と学習時間の調整】が大切であることが分かった。

3) 多職種支援

入院中の子どもたちに対する支援について、松寄³⁾は、「子どもたちが『人生をよりよく生きる』ことをめざして、たとえ療養中であっても、できる限りの発達促進的な環境を提供し、療養体験のネガティブな影響を最小限に、ポジティブな影響を最大限にすることである」と述べている。今回、通級、オンライン授業に加え、患児の入院期間中、理学療法

士、公認心理師、医療社会福祉士(以下MSW)と多職種で協働し学習支援を行った。

リハビリでは、母親より「リハビリはたくさんした。野球もバスケも廊下でした」「(患児)ドッジボール楽しかった」「宝探し、何十回もやっていた。ありとあらゆるところで」と『遊びを取り入れた運動療法』を行うことで、患児にとって身体的、精神的なストレスの緩和に繋がっていた。

公認心理師との関わりにおいては、「(患児)粘土」、母親からは「粘土で寿司を上手に作っていた。私が夢中になって、あの時間が貴重でした。今は全くないから」と『作業を通じた心理的サポート』が得られていた。

MSWと協同し企画した院内探検では、事前に準備しておいた患児への案内パンフレットを元に、ヘリポート見学、スキルスラボにて研修医の協力の下、腹部エコー、心臓マッサージなど白衣を着用し、実際に体験した。また、ドクターカー、救急車に実際試乗し、MSWから説明を受けた。見学終了ごとに患児の好きなキャラクターのカードを、全箇所見学終了時にはメダルを渡し、院内探検を達成した労いを伝え、体調不良なく終わることが出来た。「(患児)楽しかった」「ドクターヘリの屋上に行った」「(患児)今日ドクターヘリ見えた」と『院内でしか経験できない楽しい思い出』となっていた。

多職種の復学支援は、患児にとって【多職種との交流による学び、心理的サポート】となっていたと考えられた。

2. 復学後の思い

1) オンライン授業

母親は、「オンラインで学校の雰囲気も授業の感じとかも分かって良かった」「何にも知らないより心強かったし、友達ともそれで繋がって」「長期間全然会ってないって感じでないから、パッと行きやすかった」「ずっと行きたい、行きたいって言って」と『オンライン授業による復学への安心感』が得られていた。また、「ウェルカムがすごかった」「だから余計すんなり行けたかもしれないですね」と、『クラスメイトとの繋がり、大切さ』を感じており、患児は「学校楽しい」「算数好き」「鬼ごっこ楽しかった」と、『学校に慣れ、学習を楽しんでいる』ことが分かった。一方で、「ちょっと緊張するって言っていたけど」

「やっぱり1年空いてしまうと、(患児の)存在を忘れられてしまう」と『オンライン授業を受けてなかったら患児の存在を忘れられてしまっていたのではないか』という不安を持っていた。小堀は⁴⁾「こどもの療養生活を支える上でも、復学を支援するにあたり、入院中よりこどもがこども同士のつながりを絶たないでいられるようなサポートが必要である」と述べており、入院中での【オンライン授業による繋がり、大切さ】が重要であることが分かった。

また、担当教員からは、オンライン授業を行って、「友達と顔を合わせて「バイバーイ」「また明日」「切るよー」とお互いに声を掛け合う姿は笑顔で良かった」「同じワーク類を渡していたので一緒にすすめることができた」「友達も患児の頑張っている姿を励みに学習に取り組むことができた」と『オンライン授業により友達を身近に感じている』ことが分かり、【オンライン授業の効果】を知ることができた。

2) 多職種支援について

リハビリにおいて、母親より、「リハビリの人と遊んだりするのは楽しんでた」「フラフープたくさんした」「宝探しすごくたくさんした」「野球すごくたくさんした」「活発だった」「リハビリ室に行った」と『リハビリの楽しい思い出』を感じていた。退院後時間が経過しているにもかかわらず記憶に残っていることから、苦痛を感じる人が多い入院生活の中にも、入院中の楽しかったことのひとつになっているのではないかと考えられた。

院内探検においては、患児からは、「ヘリコプター」「ドクターカーでドライブした」「楽しかった」、母親からは「探検のこと思い出して喜んでいました」「先生にゼリーつけてエコーをあてたりした」「勉強以外の経験」と、『院内でしか経験できない学びの場』となり、【多職種との交流による学び】を得ることができたと考えられた。

3) 復学後の学校での様子

2年生の6月から復学し、「いつ来るん？いつ来るん？ってみんなが気にしてずっと言ってくれていた」「ウェルカムな感じ」と、クラスメイトは『患児の復学を楽しみにしている』様子が伺え、「サプライズで行くって自分で」「すごく湧いていた」と、クラスメイトは喜び、『復学した患児への受け入れ』

がみられた。患児も「楽しみで行きたすぎて」「ずっと行きたい、行きたいって言って」と、【復学への喜び】を感じていた。前田ら⁵⁾は「特に学童期の患児においては教育や学校での友人との交流が生活の中で重要な位置を占めている」と述べており、クラスメイトとの良好な関係が保たれていることも復学がスムーズにできる要因の一つであることが分かった。一方で「(患児)ちょっと勉強大変」「(宿題)いっぱい出される」と『宿題の多さ』を感じ、母親から「先生が学校に行っていない時の分を全部やらせようと必死で」「私はとばしてくれてもいいなって思ったんですけど、やっぱり基礎が大事や」と言っていて「プリント5枚とかワーク何冊とか、そんないきなりねえ」と『復学後の遅れを取り戻す困難さ』を感じ、【学習の遅れ】が問題となっていた。また、「落ち着いているって言われますね。2歳のときから大人の中でずっと入院生活で」「他の子は2年生とか。ねえ、子ども子どもしている。」と患児は『他のクラスメイトより落ち着いた態度』であり、【入院生活で大人との関わりの多さ】が考えられた。

また、母親から「いろんなことやりたいって」「カヌーやりたい」患児からは「野球やってみたい」と今後『いろいろなことに対する挑戦、希望』を持ち、【未来への前向きな気持ち】が感じられた。

インタビューを終えて、「ほんとにここに来れるの楽しみにしていた」「(患児)うん」という声を聞くことができた。

担当教員からは、「いつも患児の話題は子供達の会話の中でつきなかった」「〇〇くん、いつから来られるのかな」「明日は教室にいたりして」「お手紙書きたい」「2年生になっても待っているよ」と、『クラスメイトは患児の復学に期待している』ことが分かり、「オンラインで繋がっているから一体感が深まった」と、オンライン授業は復学がスムーズにできる過程の一つであることが示唆された。

今回の研究では、事例が1例であったため、一般化するには限界があった。環境面に関しては、Wi-Fi環境の調整上、オンライン授業開始時期が予定より遅くなり、また、患児の移植の時期など、体調面での調整が困難であった。

今後も、小学校、中学校、高校など学習面でのサポートが必要である患者に対して、復学がスモー

ズにできるよう原籍学校との連携を図り，通級やオンライン授業の支援の継続，また多職種と協同し，個々に応じた学習面でのサポートや自宅での環境調整を退院前に行っておくことが必要である。

結 論

1. オンライン授業により原籍学校との繋がりを持つことで，不安の軽減を図り，復学への一助となった。
2. 通級は，学習時間と体調のバランスを考慮し，医療者側が通級担当教員と連携し，援助していく必要がある。
3. 多職種支援は，苦しい入院生活の中で楽しく学習することができ，よい思い出となった。

利益相反

本論文に関して，開示すべき利益相反なし。

文 献

- 1) 平賀健太郎：小児がん患児の前籍校への復学に関する現状と課題 保護者への質問紙調査の結果より．小児保健研 2007；66：456-464
- 2) 永吉美智枝，斉藤淑子，足立カヨ子，他：小児がん経験者の復学後の成長発達過程における生活上の困難．日小児血がん会誌 2020；57：150-156
- 3) 松寄くみ子：病院内で教育を保障する人々 入院中の子どもの「学ぶ喜び」と「困難を乗り越える力」臨床心理士による支援．小児看護 2016；39：1395-1400
- 4) 小堀裕美：A施設における小児がん患児の復学支援の現状と課題．小児がん看護 2011；6：34-43
- 5) 前田貴彦，杉本陽子，宮崎つた子，他：長期入院を必要とする血液腫瘍疾患患児にとっての院内学級の意義－院内学級に在籍した患児・保護者の調査から－．小児保健研 2004；63：302-310

Experience of multiprofessional hospital-based learning support with a combination of face-to-face and online education

Hiromi SHINOMIYA, Miyu KITANO, Chiyomi NISHIZAKI, Tomoko TAKEICHI, Sayuri YAMATO

8 th floor North Ward of Japanese Red Cross Tokushima Hospital

This study aimed to facilitate the return of children to school by incorporating online classes, hospital visit education classes, and multi-professional support so that they could experience the joy of learning, which is necessary for their growth and development. The participants included one child with childhood cancer, his mother, and one teacher in charge of the original school. The affected child and his mother were interviewed, and the teacher in charge was asked to answer a questionnaire.

Thoughts before returning to school were "expectations and effects of online classes," "expectations and anxieties about returning to school," "expectations and lack of experience regarding the introduction of online classes," and "adjustment of expectations and study time for commuting classes." The child said, "After returning to school, I felt the importance of the connection and online classes and the effects of online classes."

Therefore, having a connection with the original school helped reduce anxiety and facilitated the student's return to school. Considering the balance between study time and physical condition and cooperation between medical professionals and teachers in charge of the class is necessary to provide support. Multi-professional support created a good memory for him, and he enjoyed learning during hospital stay

Keywords : online education, hospital visit education classes, multi-professional support, childhood cancer

Japanese Red Cross Tokushima Hospital Medical Journal 30 : 90-100, 2025
